「奉使琉球図」と慶良間

黒嶋 敏（東京大学史料編纂所）

◎那覇―福州航路と慶良間

那覇と福州とを結ぶ航路は、琉球にとって重要な海の道で、多くの船が行き交いました。とくに中国の皇帝から派遣される冊封使は、琉球国王の大切な国賓になり、万全の態勢で迎えなければなりません。

航路上で大きな役割を果たしていたのが、慶良間諸島です。いまでも国の避難港に指定されているように、天然の地形に恵まれた慶良間諸島は風待ちや潮待ちに適していました。また、琉球が中国に派遣した船では、慶良間出身の船乗りも活躍していたと伝えられています。

◎描かれた冊封船

「奉使琉球図」（沖縄県立博物館・美術館所蔵）は、1758年に琉球へ派遣された冊封使の旅を描いた絵画です。福州を出発してから那覇に至り、首里城で新しい国王を冊封した後、ふたたび海を渡って帰国するまで、特徴的な場面を全20葉に分けて仕立てています。そのうちの「山島避風」では、帰国する途中の冊封船など4隻が、風待ちのために慶良間海峡に停泊した様子を描いています。

「奉使琉球図」のうち「山島避風」（沖縄県立博物館・美術館所蔵）

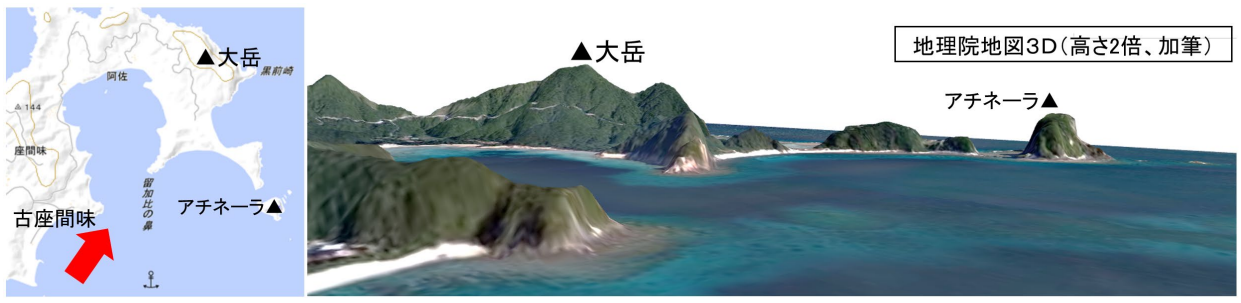
※「琉球王国交流史デジタルアーカイブ」（https://ryuoki-archive.jp/news/3816/）でも公開中です。

◎冊封船はどこにいた？

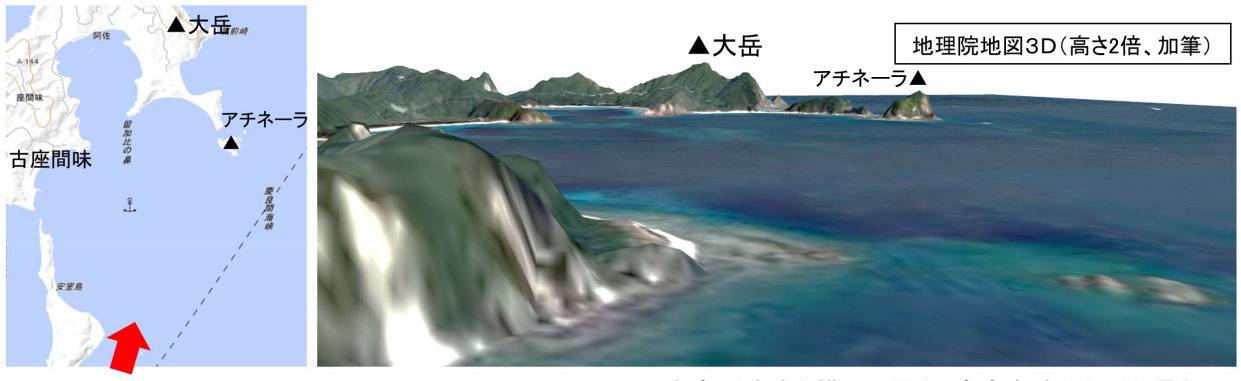
「奉使琉球図」は、琉球に行った経験のない絵師が別の絵から写して仕立てているため、多少のデフォルメもあります。

慶良間の場面はどうでしょうか。背後の山は、高さが誇張されていますが、座間味島の大岳でしょう。大岳の麓に入り江があるので、冊封船の停泊場所は安護の浦になります。

ただ安護の浦だとすると、右手のアチネーラがやや不自然です。もう少し引いた場所から描いているとすると、冊封船は古座間味沖に停泊していたのかもしれません。



安護の浦を描いた場合（古座間味沖から見た景色）



古座間味沖を描いた場合（安室島沖から見た景色）

【参考文献】琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究会編『琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究』思文閣出版、2019年